

# 琉球大学学術リポジトリ

英語で自分の考えや気持ちを伝えようとする態度を育む授業づくり：  
沖縄の文化題材を活用したCLIL授業の一提案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2021-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比嘉, ゆかり, Higa, Yukari メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/48314">http://hdl.handle.net/20.500.12000/48314</a>

# 英語で自分の考え方や気持ちを伝えようとする態度を育む授業づくり —沖縄の文化題材を活用した CLIL 授業の一提案—

Designing Lessons that Foster an Attitude of Trying to Convey One's Thoughts and Feelings in English:  
A Proposal for CLIL Lessons that Utilize Okinawan Cultural Subjects

比嘉 ゆかり

Yukari HIGA

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・南城市立大里中学校

## 1. 問題関心

文部科学省（2013）は「東京オリンピック・パラリンピック競技大会」を見据え、小・中・高等学校を通じ、英語によるコミュニケーション能力を確実に養い、児童生徒の英語力を向上させることを目標とした「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を打ち出した。小学校の外国語活動が中学年に前倒しされ、高学年では教科となったことから、外国語専科教員や ALT の積極的活用、電子黒板をはじめとする ICT の導入と、小学校でも言語活動を中心に据えた授業が展開され、本校校区の小学校においては小学1年生から英語の授業がカリキュラムの中に取り入れられている。

しかし、筆者が2020年5月に沖縄県内の中学1年生175名の生徒を対象に質問紙調査を行ったところ、英語の授業が「好きではない、全く好きではない」と答えた生徒の割合は2019年の調査で19.2%だったものが2020年度では約40%に上昇しており、ここ数年で最もも多い割合だった（図1）。表1で見られるような否定的な理由が多い上、入学当初から授業の中でシンプルに「I like ~.」で伝わることを高度な「My favorite ~ is...」を必ず使おうとする、発音が下手だから英語を話さない等、「英語で何かを伝えること」より「正確な英文や発音」や「フレーズ通りに話す」ことにこだわり過ぎる姿が見られた。

筆者は2019年10月に開催された九州地区英語教育研究大会で英語科担当教員（以下、JTE）52名、11月に開催された沖縄県ALT研修会でALT66名に対し、記述式のアンケート調査を実施した。JTEは生徒達の「書く」「話す」内容や発音等に「正確さ」を求め、指導が難しい（48%）という回答が多かった一方、ALTはJTEの「正確さ」を求める授業に問題を呈し、「間違えても良いから、まずは話させたり書かせたりする時間を与えない限り、生徒は話せないし書けない」という意見が大多数（82%）であった。このアンケートや表1の結果、授業の生徒達の観察から英語で何かを伝え合う楽しさよりも英語の「正確さ」が優先されていることが生徒達の苦手意識につながっていると考えられる。筆者は昨年度の研究から、授業で沖縄の文化題材を活用することが英語の授業を楽しいと感じさせ、コミュニケーションに効果のあることが把握できた。今年度はこの結果を活かし、生徒達が英語を介して自分の考え方や気持ちを伝え、英語を学ぶ喜びを感じるような授業改善を図りたい。

## 2. 研究の目的（明らかにしたいこと）

全单元で沖縄の文化題材を活用した CLIL 授業を実践することで、英語で自らの考え方や気持ちを伝えようとする意識や英語授業に対する意欲の変容を検証することである。

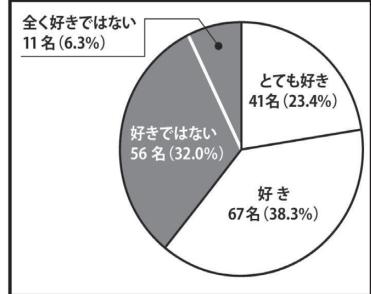


図1 英語に対する生徒の意識

表1 英語が好きではない理由

- ① 英語を間違えたら恥ずかしい(62.8%)
- ② 英語を間違えたらおこられた(52.4%)
- ③ 同じことばかり言わされた(48.3%)  
(自由記述で多かった意見・複数回答)

### 3. 研究の方向性に関する先行研究及び理論研究

#### (1) CLIL : Content and Language Integrated Learning (内容言語統合学習) について

CLIL は 1990 年代半ばにヨーロッパで平和のための複言語・複文化主義を背景として生まれ、「他教科に関連する内容の学習と言語学習の両方に焦点を当てた学習法」(二五, 2019) として現在では EU 主要国で広く浸透している。表 2 に示すとおり、Content と Communication, Cognition, Community/Culture という 4 つの C が揃うことで学習者の動機を高め、「内容」を出発点とし、自然な言語運用を行う授業を通して、より高度な認知力、思考力へと働きかける。また、共学の中から異文化理解が深まり、教室を超えて社会や世界を意識するようになる (Coyle, 他, 2010)。

表 2 CLIL の 4 つの C (木村, 2019)

CLIL の 4 つの C	
1. Content(内容) 授業で扱う科目内容やトピック。大抵は他教科の科目内容と関連があり、科目横断的なトピックの場合もある。 2. Communication (言語) 語彙や発音や文法など、言語についての知識とそれを運用する技能を指す。 3. Cognition (思考) トピックについて思考をすること。タスクを段階的に課すことによって、生徒に高次思考力を働かせることを求める。 4. Community/Culture (協学／文化) 他者と関わって共に学ぶことを指し、ペアワークやグループワークによる協同学習を行ったり、異文化や国際問題について意識を持たせる。	

平成 29 年公示の中学校外国語学習指導要領ではカリキュラムマネジメントの視点から「言語活動で扱う題材は生徒の興味・関心に合ったものとし、国語科や理科、音楽科など、他の教科等で学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること」(文部科学省, 2018) とある。この学習指導要領の考え方は、生徒が新しい経験や情報を得たときに既に持っている知識やスキルと結びつけることにより意味を理解する、という構成主義的な学習観や、CLIL を参考とした教科横断型で内容を重視する学習活動と合致する。

二五(2019)は「英語を早期から開始することに伴い、早い段階から英語嫌いを増やしてしまわないことが 1 つ重要な点といえるが、これには児童・生徒の英語学習への動機づけを高めるべく、地域を題材とした教材を取り入れることが 1 つの解決策」であり、日本の公立小学校や中学校で現実的に可能なのは英語の授業に一部他教科の内容を取り込むソフト型の CLIL 授業が有効だと述べている。継続して地域を意識させ、内容（地域テーマ）と英語の統合のみならず、1 年を通して英語の授業に一部他教科（社会科や算数、家庭科）の内容を取りこんだ CLIL 授業を実践した結果、生徒達の興味関心を高め、授業が理解しやすくなったという効果を報告した。

#### (2) 英語教育における地域教材の活用効果

近年、英語教育の場において日本や地域の文化を紹介、発信し合うという視点を取り入れる活動が多く見られ、地域教材を活用した英語教育について報告され始めた。藏満(2005)はこれまで地域の自然や歴史、料理、音楽等の文化を教材化し、各教科で実践している。その実践経験から地域教材が学習意欲を高めるだけでなく、様々な効果があることを述べている（表 3）。日本は均質的な文化ではなく各地に独自の文化が存在しており、「伝統的文化だけではなく、様々な地方文化を紹介するべき」(松岡, 2007) で、地域文化を学ぶことで日本、世界をグローバルな視点から考えるきっかけとなる。与那霸 (2007) は、国境を超えたコミュニケーションでは必ず身近な地域や文化が話の中心となり、異文化理解につながるとし、授業の中で地域教材を扱う重要性を述べている。沖縄の旧盆や三線とい

表 3 地域を教材化する理由

(藏満, 2005)

①学習価値のあるものが、地域に多数存在する。
②身近な地域を教材にすると子どもも興味を持ちやすく学習意欲が高まる。
③地域に住む人々に直接学ぶ学習では挨拶・会話力・取材力など得られるものが多い。
④地域学習を進めていくことで、自分と日本や世界との関係が見えてくる。
⑤地域を知ることで、ふるさとである地域に対する愛着が深まる。

った古より大切に引き継がれている文化から基地問題まで幅広い沖縄の題材を授業で活用することで、沖縄に対して真剣に考え、英語で熱心に語り合う姿が見られたと報告している。

### (3) コミュニケーション指導の留意点について

異文化間コミュニケーションでは、Hall(1979)が提唱した文化コンテクスト（文脈）という概念が大きく影響している。文脈からメッセージの意味や意図を汲み取り「言わなくてもわかる」コミュニケーション文化を高コンテクスト文化（日本）、はつきりとメッセージを言葉で伝える「言わなければわからない」コミュニケーション文化（欧米）を低コンテクスト文化と位置づけている（図2）。両者間のコミュニケーションに対する価値観の相違点を生徒達に教えなければ、文部科学省（2013）が推し進める「英語によるコミュニケーション能力」は、本当の意味では身につかない（竹内、2018）。明確な説明や的確なリアクション、ジェスチャーや声色、表情の作り方など、相手に自分の意見を伝えるためにどのような工夫ができるのか考えさせる指導をする必要がある（図3）。

中学生になると羞恥心が強く人前で話すことを嫌うようになるため、「学習者の発音などが致命的でない限り、誤りを訂正する態度よりも、できるだけ積極的に英語を発する姿勢を作る指導が望まれる」（有本、2000）。小池（2003）は「英語のコミュニケーション能力をつけることが大切だと、教師がいくら声高に説明したり生徒の尻をたたいたりしても、生徒に学習意欲がなければ英語の力がつくことなど覚束ない」と述べている。学んだ英文法を活用し、自分の考えや気持ちを話したくなるような状況や場面を提示し、コミュニケーションへの意欲的な参加を促すことが重要となる。

以上の先行研究や理論研究より、ソフト型のCLIL授業を参考に全ての単元を通して沖縄の文化題材を活用し、生徒達が英語で自分の考えや気持ちを伝えようとする意識や、英語授業に対する意欲にどのような変容があるか検証することを研究の方向性とする。

## 4. 研究方法

### (1) 沖縄の文化題材を活用したCLIL授業実践①

2020年7月に沖縄県内のA中学校、中学1年生4クラス122名に対し、美術科とタイアップした授業を行った。授業の前後で作成させた英作文の変容を分析した。

### (2) 沖縄の文化題材を活用したCLIL授業実践②

2020年11月に沖縄県内のA中学校、中学1年生6クラス169名に対し、道徳、総合的な学習とタイアップした授業を行った。2019年、2020年に実施した沖縄県内の4学校、734名に対する意識調査の分析を統計ソフトHAD17\_102で多重比較Holm法分散分析を行った。

### (3) 学力調査分析（パフォーマンステスト・定期テスト・沖縄県学びのたしかめテスト）

2020年9月、12月に沖縄県内のA中学校、中学1年生4クラス122名に対して実施した学力調査の分析を行った。

### (4) 英語授業に関する意識調査分析

2020年5月、12月に沖縄県内のA中学校、中学1年生4クラス122名に対して実施した英語授業に関する意識調査の分析を統計ソフトHAD17\_102で対応のあるt検定分析を行った。

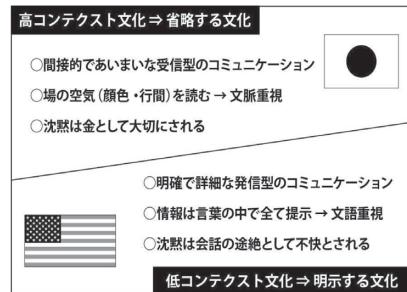


図2 高文脈文化と低文脈文化



図3 合いの手シート

## 5. 研究内容

### (1) 年間指導計画

沖縄の文化題材を全ての単元で活用する年間指導計画（表4）を作成し、授業を実施している。

表4 年間指導計画 (TOTAL ENGLISH1)

単元内容	沖縄の文化題材をどう取り入れるか・パフォーマンステスト (⇒後に示したもの)
授業びらき	「What do you study English for?」何のために英語を学ぶのか考えさせる
Lesson 1 好きな食べ物	「I like ~.」自分の好きな（苦手な）料理→和食→沖縄料理と変化させ、自分の好きな（苦手な）食べ物について話したり書いたりすることができるようにする⇒インタビューテスト
Lesson 2 伝える意識	「Do you like ~? It is ~.」相手に質問させる際「より伝わる方法」を考えさせる⇒スキットテスト
Lesson 3 自己紹介	自己紹介をさせる際「より伝わる方法」「他国（自国・沖縄のことを含む必要がある）での自己紹介」を意識させる⇒自己紹介ライティング・スピーチテスト ※美術科とタイアップ（沖縄題材を扱った作品活用）
Lesson 4 お菓子	「What's this? It's ~.」沖縄のお菓子をALTに紹介する⇒即興スピーチテスト
Lesson 5 他己紹介	「This is ~. He(She)is ~. He(She)plays ~.」沖縄の偉人を1人選び、紹介する／他己紹介をさせる際「より伝わる方法」を意識させる⇒沖縄の偉人紹介ライティングテスト
Lesson 6 文化比較	欧米と沖縄の違いや沖縄の未来について考えさせる⇒ライティングテスト ※道徳とタイアップ（地域の伝統芸能復活や自校の伝統行事について考える授業を行う） ※総合的な学習とタイアップ（地域の歴史を巡るフィールドワークへ向け、事前関連授業を行う）
Lesson 7 正月料理	「You can ~.」外国人向けの沖縄旅行プランを考えさせる⇒旅行プラン紹介ライティングテスト 世界・日本・沖縄の正月料理の違いは何か考えさせる⇒おせちレポート提出
Lesson 8 中秋の名月	「現在進行形」⇒沖縄の画像を見て、何をしているところなのか説明させる⇒インタビューテスト 世界・日本・沖縄の中秋の名月の文化に関する違いは何か考えさせる⇒レポート提出
Lesson 9 過去形	「I studied ~. I played ~.」自分の過去や沖縄の過去について知る⇒リーディングテスト ※総合的な学習とタイアップ（南城市フィールドワークで調べたことを活用）⇒英作文練習

### (2) 美術科の教材を活用した授業 (TOTAL ENGLISH1, LESSON3 Hello, Everyone.)

美術の授業で「私の沖縄のイメージマップを色で作ろう」という活動が実践され、生徒達は沖縄のイメージを充分に膨らませ、その中から自分が表現したいものを選択し、色で表現した。美術科担当教員は他の題材を扱っていた時よりも、色彩のバリエーションが広がったり、表現に深まりが出たと評価していた（図4）。この単元でメインとなる活動は「外国人に自己紹介をする」である。自己紹介文を完成させる上で実際に生徒達が作成したイメージマップを活用した（表5）。

表5 美術科の教材を活用した授業指導案

	活動 内 容	生 徒 の 様 子
導入	やり取り⇒合いの手入れよう！ 「外国人の人に紹介したい沖縄スポットは？」	生徒同士違う意見が出たので、ワークシートにある合いの手だけでなく、「Where, where?」→「In Nago, very wonderful!」など、会話が広がった。
展	事前に作成していた自己紹介を見せながら教師が外国人になって small talk（教師が実際に外国で受けた質問）を行い、「伝わらなさ」を確認させる	「What is ○○（地域や県名）?」「Is Okinawa Japan?」「What is Okinawa soba?」などと質問されたことで「もっと説明した方がいいのかな」と自分の作った自己紹介文を見直し始めた。「沖縄とか自分の住んでる所のことを伝えた方がいいんじゃない？」と文章を追加しようとする生徒も出てきた。
開	沖縄のことをもっと伝えたいという意見が出たところで「いい物を見つけたんだけど」と美術のイメージマップを提示、配布する	教師は指示を与えることはなかったが、自分のイメージマップを見て「これを言おう、言いたい」という意見が出たり、自ら和英辞典で単語を調べたり、表現方法を質問したりして自分の文章を修正、追加し始めた。
まとめ	・教師が「実際に外国で行った他言語の自己紹介文」と「初めて外国で行った自己紹介文」の紹介をしながら、初自己紹介では何も伝わらなかつた体験を話す ・Can-do振り返りシートを記入する	・英語以外の言語の中に『「沖縄」「エイサー」が聞こえた』と驚いたり、教師の自己紹介文を聞き比べ、初めの内容と全く違うことに気づき、「何でこんなに変わったの？」などと新たな問い合わせられた。 ・「実物とかジェスチャー入れてもいいの？」と、自己紹介発表に向か、より伝わる方法を考える生徒が出てきた。



図4 沖縄イメージマップ

この授業後、ほぼ全員の生徒が自作の沖縄イメージマップから自分の紹介したい沖縄を選択し、自分の自己紹介文を修正または加筆を行った。首里城火災、得意なけん玉が日本文化であること等、

基本の自己紹介文で終わることなく、生徒達自身の考えが盛り込まれた文章を完成させた（表6）。ALTに対するパフォーマンステストではイメージマップや写真等の実物を使用したり、ジェスチャーを加えるなど、自分なりに工夫し、原稿に頼ることなく懸命に発表しようとする姿が見え、自己紹介が相手にきちんと伝わったことを満足とする声が多くいた。また「自己紹介で沖縄の良さやお勧めのものを言うと、外国の人が沖縄に来たいという気持ちになってくれると思う」「自己紹介をしながら沖縄の魅力、外国にない素晴らしいを伝えられる」という意見が上がった。

表6 生徒の自己紹介文の変容（原文ママ）

授業前の自己紹介文	授業後の自己紹介文 ※（ ）が変容部分
Hello, everyone. I'm ○○. I'm thirteen years old. I'm from Okinawa. I like kick boxing. Nice to meet you.	Hello, everyone. I'm ○○. I'm thirteen years old. I'm from Okinawa, (Japan.) <b>(Shuri castle in Okinawa was beautiful, but it was burned.)</b> Nice to meet you.
Hello, everyone. I'm ○○. I'm thirteen years old. I'm from Okinawa. I like music. Nice to meet you.	Hello, everyone. I'm ○○. I'm thirteen years old. I'm from Okinawa, (Japan.) I like (kendama). <b>(Kendama is Japanese toy, culture. It's a cup and a ball.)</b> Nice to meet you.

### （3）30年後の未来を考える授業（TOTAL ENGLISH1, LESSON6 Junior High School in the U.S）

この单元ではウェブ上で紹介されている外国の学校についての本文内容を読み、外国と日本の学校との比較から文化の違いを学ぶことができる。「もし自分がウェブサイトを開設するとしたら」という視点を持たせ、本授業前に伝統芸能復活を題材とする道徳授業、本授業後に地域の歴史を巡る総合的な学習を実践した。沖縄に存在する文化、将来（30年後）も残っていてほしい沖縄の文化は何かを意識させ、自分が世界各国に発信、紹介したい沖縄の文化について考えさせた（表7）。

表7 30年後の未来を考える授業指導案

	活動内容	生徒の様子
導入	やり取り⇒合いの手入れよう！ 「あなたの好きな沖縄料理は？」	同じ意見が出たら「How about sweets? Okinawan sweets?」というように、既習の「How about~?」を用いて新たな問い合わせをする生徒が出てきた。
展開	・30年後に残したい沖縄文化は何か付箋紙に書かせ、グループでシェアさせる。 ・グループで1番残したい文化からランキングマップを作らせる（図5）。	・「This card, bye-bye, O.K? Are you O.K, Eisa bye-bye? Really?」といった教師の問い合わせにより、ほぼ全てのグループで1人の意見で話し合いが進むことがなく、生徒同士でランキングマップを修正した。修正時より文化カードを互いに英語で読み合ったり「This is No.1.」などと自然に英語でコミュニケーションを図るグループが増えた。
まとめ	・ランディングマップには6枚の文化カードを貼ることができるが、実際手元には7枚で、必ず1枚落とさないといけないというしきけを作り、教師が様々な問い合わせを行うことで全員が意見を出しやすい雰囲気を作る。	・「1つも捨てられないって英語は何て言う？」「全部大事って何て言うの？」など、生徒から新たな問い合わせが生まれた。
まとめ	・全体でシェアし、学級のNo.1を確認する ・改めて自分が残したい沖縄文化を考えながらCan-do振り返りシートを記入する	・最初に書いた付箋紙の意見と変わる生徒が出てきた。 ・なぜこの文化を残したいのかという理由を真剣に書いていた。 ・振り返りシート記入後、英語で自分の意見を述べ合う姿が見られた。

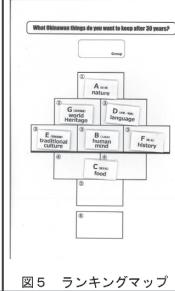


図5 ランキングマップ

30年後の沖縄の未来に思いを馳せ、自分の家族と関連させて考えたり、他の文化とつなげて考えた感想の記述が多く見られた（表8）。授業のまとめの時点で自然に友達と互いにリアクションし合ったり、「沖縄と英語がつながる授業はすごいし、どっちも勉強できるから良い」「沖縄のすごさを世界に発信していきたい」「沖縄はやっぱり素晴らしい」という意見を述べるなど、身近な沖縄の文化題材を扱うことが、より英語を通して「自分の考え方や気持ちを伝えたい」と感じるとわかった。

この授業後に行われた地域フィールドワーク（総合的な学習）後の発表においても自分の住む地域の歴史的遺産の偉大を感じ、多くの人々に伝えたり、自分達の手で大切に残していくたいという意見を述べる生徒が多く、「フィールドワークでエイサー見たけど、伝統芸能ってやっぱりすごいね。伝統芸能（のカード）落とさなければ良かった」「授業で世界遺産（のカード）を落としたけど、絶対無くしたらだめと思った」と英語の授業を振り返る生徒が出るなど、学びのつながりを感じた。

表8 授業後の生徒達の感想（振り返りシート原文ママ）

・今日の授業でおじいちゃんを思い出した。おじいちゃんが話している方言がずっと受け継がれてきているんだと思った。僕はこれからおじいちゃんから方言をならって、30年後までつなげていきたい。（男子）
・自然も人の心も、いや、本当に全部30年後だけでなく一生残さないといけない。捨てられるものなんか1個もない。（女子）

筆者はこの授業を昨年度も沖縄県内の中学校3校、異学年で実践した。2年分の授業後の振り返りアンケートから、授業に対する生徒達の意識について分散分析を行った結果、統計的有意差は認められなかつた（表9、10）。A中学校以外は初見の生徒達に対して単発的に授業を行つたが、この結果から沖縄の題材を取り入れた授業は異なる学校、異学年でも生徒達に英語の授業の楽しさを感じさせ、沖縄を発信する気持ちが高まることがわかる。年度当初から授業の中で沖縄の題材を活用したA中学校の生徒達が他の学校に比べ、好意的な回答をした率が高かつたことが大変興味深い。

表9 英語と沖縄がつながる授業は楽しいと思うか

分散分析結果					各中学校の回答率	
	差	F値	p値	調整p値	とても楽しい・楽しい	全く楽しくない・楽しくない
対B中学校2年生	0.014		0.90	n.s.	97.48%	1.21%
対C中学校3年生	-0.163	0.101	0.68	n.s.	94.97%	5.03%
対D中学校1・2年生	-0.177		0.66	n.s.	93.0 %	7.0 %
n.s.= non significant (有意ではない)					A中学校: 98.79%	A中学校: 1.21%

表10 沖縄を発信することは大切だと思うか

分散分析結果					各中学校の回答率	
	差	F値	p値	調整p値	とても楽しい・楽しい	全く楽しくない・楽しくない
対B中学校2年生	0.051		0.70	n.s.	94.9%	5.1%
対C中学校3年生	0.015	0.076	0.96	n.s.	92.36%	7.64%
対D中学校1・2年生	-0.036		0.91	n.s.	86.99%	13.01%
n.s.= non significant (有意ではない)					A中学校: 95.8%	A中学校: 4.2%

## 6. 結果と考察

### (1) 学力調査（パフォーマンステスト・定期テスト・沖縄県学びのたしかめテスト）結果

美術科の教材を活用した授業後、「JTE・ALTに対し、自己紹介をする」パフォーマンステスト、期末テストで「外国人に自己紹介をするための原稿を書く」英作文テスト、3ヶ月後に沖縄県学びのたしかめテストで「外国人に自己紹介をする」英作文テストを実施した（表11）。

表11 各学力調査結果とその評価基準

	評価A	評価B	評価C
パフォーマンステスト(122名)	111名(90.9%)	11名(9.1%)	0名(0%)
期末英作文テスト(121名)	94名(77.7%)	16名(13.2%)	11名(9.1%)
沖縄県英作文テスト(117名)	93名(79.5%)	11名(9.4%)	13名(11.1%)
パフォーマンステスト評価基準		期末英作文テスト評価基準	沖縄県英作文テスト評価基準
外国で伝わるような内容である 原稿に頼らず、発表している ジェスチャーや声の大きさを意識している		3点×5文=15点 スペルミス、無ビリオドは内容に関わらず-1点とする	3文以上書かれている(1点) スペルミスが無い(1点) 自己紹介の内容である(1点)
A 7文以上で伝えることができる	A 13点以上(85%以上)	A 3点(全て基準を満たしている)	
B 5~6文で伝えることができる	B 7点~12点	B 2点(2つの基準を満たしている)	
C 3~4文で伝えることができる	C 6点以下(45%以下)	C 1点(1つの基準を満たしている)	
A校平均正答率 13.8点(56.4%)	県平均正答率 12.8点(60.8%)	地区平均正答率 13.0点(62.1%)	市平均正答率 12.4点(59.2%)

自分自身の沖縄をイメージした美術の作品から外国で伝わるような自己紹介を加筆修正を行い、オリジナルの自己紹介文を完成させたことが知識の定着につながり、各学力調査にも臆することなく、自信を持って臨んでいた。その上、パフォーマンステストで多くの生徒が評価Aを取つことが自信と意欲につながり、通常、生徒達が苦手とする英作文に挑戦しようとする態度が見られる。沖縄県学びのたしかめテストでは、沖縄県平均正答率の74.9%を上回る79.5%の生徒が評価A、全問題の平均正答率は沖縄県、地区、市、全ての平均正答率を上回り、昨年度の沖縄県webテスト

(類似問題)における本校の平均正答率 57.7%も上回った。沖縄の文化題材を活用した CLIL 授業が、これまでのスキルを重視する伝統的な授業に比べ、知識理解の面で効果があることがわかった。

## (2) 英語授業に関する意識調査分析

### ①「沖縄発信（英語で伝える）」に対しての生徒達の意識

5月の調査でも沖縄のことを英語で発信することが大切だと回答する生徒は多かったが、11月の調査では沖縄のことを発信することが「とても大切」と回答した生徒が 57 名 (47.1%) から 83 名 (68.6%) と増加した。平均値と標準偏差を算出するとともに t 検定を行った結果、統計的有意

表12 沖縄発信に対する生徒達の意識

	M	SD	t 値	p 値
5月	1.664	0.704	4.635	<.001
11月	1.336	0.541		

M=平均値, SD=標準偏差

差が認められ、授業で沖縄の文化題材を活用することで沖縄について英語で発信しようとする意識が高まったことがわかる。外国人や他の地域の人々に「伝える」ために、自分の地域や沖縄と英語の授業をつなげることはとても大切であると答えた生徒が最も多かった (51 名, 42.1%)。これまでの授業を振り返り、心に残っている授業や活動を選択する質問に対して、大半の生徒達が沖縄の文化題材を活用した授業を選択し、その理由として自分自身のことや沖縄のお菓子、沖縄の偉人や未来について外国人に「伝えたい」と書いた生徒が多かった。授業で沖縄の文化題材を活用すると生徒達が初めて触れる「沖縄」が多いことに気づき、沖縄のことを深く考える機会となる。その機会が生徒達に驚きや感動を与え、沖縄の素晴らしさを再発見し、その素晴らしさを積極的に「伝えよう」とする生徒が多く、生徒達のアイデンティティーの意識にもつながると考えられる。

### ②英語の授業に対する生徒達の意欲

英語の授業が好きかどうかという項目においても、①と同様に t 検定を行ったところ、統計的有意差が認められた (表 13)。「とても好き」だと回答した生徒が 41 名 (23.4%) から 98 名 (56.0%) と大幅に増加したことから、5月の調査よりも英語の授業を好意的に感じていることがわかる。5月の調査で英語の授業を「好きではない」、「全く好きではない」と答えた生徒の大半が「とても好きである」、「少し好きである」という好意的な回答に変容した (図 6)。

また、英語の授業に対する感想の自由記述から、授業で学んだ伝統的な琉球菓子を製造している工場に実際に出向き、調べ学習と味見をした生徒や他の琉球菓子を調べた生徒、すごいうちなんちゅ（沖縄人）紹介から沖縄の偉人を歴史的人物までさかのぼって調べた生徒がいた。沖縄の文化題材を活用することが「伝える」という意識だけでなく、生徒達のより「知りたい」という意欲に結びつき、自ら学びに向かおうとする姿勢につながることが推測できた。

以上の結果から、成果として沖縄の文化題材を活用した CLIL 授業を実践することが、英語で自分の考えや気持ちを伝えようとする意欲を高め、英語の授業を好意的に感じさせると理解できた。また、言語活動において自分自身で思考し、表現することが増えたことで知識の理解につながることや、自ら次の学びに向かおうとする自律学習に結びつくこともわかった。課題は 4 技能（書く・話す・聞く・読む）の言語活動のバランス良い組み込み方である。

表13 英語授業に対する生徒達の意欲

	M	SD	t 値	p 値
5月	2.210	0.929	8.958	<.001
11月	1.353	0.591		

M=平均値, SD=標準偏差

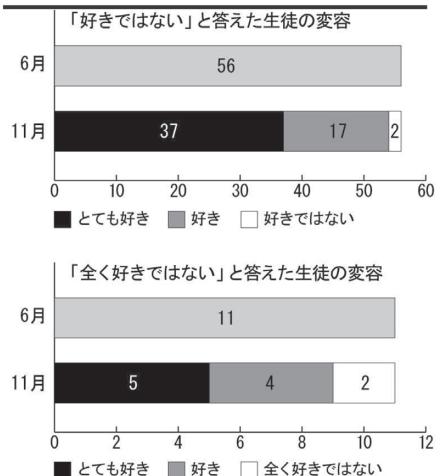


図 6 生徒の意識の変容

書く・話す活動が中心となることから、英語の沖縄読み物資料を聞いたり読んだりした後、音読につなげたり、自分の意見を述べたりするなど、技能統合的な言語活動の工夫もできると考える。

## 7. 今後の展望（まとめ）

教職大学院での2年間の研究から、英語の授業に沖縄の文化題材を活用することが生徒達の思考を刺激し、「伝えよう」という意欲を持ち、英語を介してコミュニケーションを図ろうとする態度につながることが理解できた。また、横断的に他教科と関連させた言語活動を行うことで知識の理解を深めたり、既習したことを基に自ら次の学びに向かう姿も見られた。このような生徒達の姿から、沖縄の文化題材を活用するCLIL授業は、来年度から完全実施となる新学習指導要領の3つの柱である「学びに向かう力」「知識・理解」「思考力・判断力・表現力」を育むことができるのではないかと考える。

沖縄県の自然・歴史・文化は生活の舞台であるとともに心の拠り所であり、将来へ向けて継承・発展に貢献しグローバルな視野で活躍する人材の育成に努める必要がある（沖縄県教育委員会、2020）。沖縄の文化題材を教材化し、生徒達に自らの地域について学ばせることで沖縄を愛する気持ちや、誇りを感じる心を育むことが重要であり、それが英語教師である筆者の役割だと考える。多くの生徒達の「英語の授業で沖縄を学べて良かった」という感想が感動を与えてくれた（図7）。この感動を糧に、これからも胸を張って英語で沖縄について伝えることができる生徒の育成に尽力していきたい。

沖縄のものがせんぶのこせたらいいなと思いました。  
つらくても、沖縄の何かが自分を支えてくれたらいいと思  
います。ぼくは、沖縄に生まれてきて幸せだ。

図7 生徒の授業に対する感想

## 【引用文献】

- 有本純(2000). 「英語コミュニケーションにおける心理的障壁を除去する為の方略研究」『関西国際大学研究紀要』, 創刊号, p.147-157.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D.(2010). "CLIL: Content and Language Integrated Learning". Cambridge:Cambridge University Press.
- Edward,T.Hall. 岩田慶治・谷泰（訳）（1979）『文化を超えて』. TBS ブリタニカ.
- 木村松雄編著(2019). 『新しい時代の英語科教育法：小中高を一貫した理論と実践』. 学文社.
- 小池生夫編著(2013). 『提言 日本の英語教育：ガラパゴスからの脱出』. 光村図書出版株式会社.
- 藏満逸司(2005). 「地域から学び始める子どもたち」『月刊 子どもと教育』, pp.28-32. あゆみ出版.
- 松岡信哉(2007). 「地方の文化を紹介する」『英語教育』, 2007年6月号, pp.26-27
- 文部科学省 (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afIELDfile/2014/01/31/1343704\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afIELDfile/2014/01/31/1343704_01.pdf)  
(2021.1.22 取得)
- 文部科学省(2018). 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語編』. 開隆堂出版会社.
- 二五義博(2019). 「地域を題材とした小中一貫の英語学習に関する事例研究：CLILの4Cの視点より」  
『中国地区英語教育学会研究紀要』, No.49, pp.65-74.
- 沖縄県教育委員会(2020). 『令和2年度版 学校教育における指導の努力点』. 沖縄県教育委員会.
- 竹内愛(2018). 「英語授業におけるコミュニケーション能力に関する一考察」. 『共愛学園前橋国際大学論集』, No.18, pp.309-316.
- Yonaha, K. (2007). “Introducing Okinawan culture material in English classes : Its significance and how and what to introduce”『名桜大学総合研究』11巻, pp.25-35.